

あるベテラン指導員から学んだこと

(職業能力開発総合大学校 基盤整備センター 平川 政利)

一般の職業訓練では、仕事に関する技能の習得に重点が置かれ、仕事に対する姿勢や職業感との関わりは二の次である。しかし、職業訓練は技能習得の支援だけで事足りるのだろうか、との疑問を呈したのがあるベテラン指導員との出会いである。ベテラン指導員は、過去 20 数年クリーニング訓練を主導し、すぐれた技能とともにすぐれた人格による援助技術をもって、職業訓練指導員というより親方と呼ぶにふさわしい人である。

このベテラン指導員の支援方法は、単なる技能指導に止まらない。これから職業人として生活していく上での将来像を見据え、障害者の人生をつくり直す真剣勝負のやりとりが交わされる。それは、障害を負った者の生き方への支援といえよう。例えば、事故や病気で両足の機能を失った者は、車いすという代償手段を用いる。両足の機能は車いすで代償されても、頭の中の人生設計は大きく狂ったままである。そこで、人生設計をもう一度やり直す支援が必要なのである。こうした生き方を基盤とした職業訓練のアプローチは、「動機づけ」と「作業シミュレーションの視点」が大きな要因となっている。

(1) 動機付け

仕事への動機づけに至る前段階には大きなポイントがある。つまり、動機づけに至るには①観察、②仕掛け、③自覚の段階があって初めて完成する。釣りに例えれば、①はどこにどのような魚がいるかというポイント探し、②はそのための鉤素、糸、竿、餌、浮きなどの仕掛け、そして③は食いつきを見極めた収穫となる。これら3つの中で②が最も重要であり、真の自分を正面から見つめ直すきっかけづくりである。クリーニングという仕事に正面から立ち向かうか否かの厳しいせめぎ合いである。きっかけは、問題行動が目にあまる時点（指示の無視、生活リズムの乱れ等）をとらえ、徹底的に叱りつける。または、のぼせ上がっているときにお灸をすえる、天狗になっている鼻をへし折り、徹底的にたたきのめす。ある程度の期間、利用者は自分の言うことを親身になって聞いてくれ、信頼を寄せていた指導員に怒鳴られてびっくり仰天する。ここがある意味でねらい目である。新しい葡萄酒は新しい革袋に入れろというように、古い体質を拭い去らなければ新しいものが生まれない。そのために、甘えや欺瞞など仕事に向かう姿勢として立ちはだかっている障壁を崩していく仕掛けである。

(2) 作業シミュレーションの視点

一般的に、技能は教えられて覚えるのではなく、見よう見まねで覚えるものといわれている。一般論としてはそれでよいかもしれないが、障害者の場合はそうはいかない。障害によっては、見ようにも見えない人もいるし、また、たとえ見えたとしても、麻痺などのためにまったくちがった身体（からだ）の動きになることもある。こうしたことから、障害状況を見極め、一人ひとりの状況に応じた指導が必要である。

一人ひとりの状況に応じた指導とは、障害による作業の制限を姿勢、目線、タイミング、身体尺度などから見極めて改善策を見出すことである。その道の技を熟成させた結果、多種多様な作業パターンを思い描き、あたかも自分の体の中で障害を乗り越える試行を繰り返す。障害者の身になった型を作り出していく。このように障害の立場になった作業シミュレーションによる指導によって、一人ひとりに合った技能習得を支援していくのである。